



Title	オランダの近代建築と日本 : 大正から昭和初期における建築文化交流について
Author(s)	奥, 佳弥
Citation	デザイン理論. 2004, 44, p. 148-149
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53155
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

オランダの近代建築と日本

— 大正から昭和初期における建築文化交流について —

奥 佳弥／大阪芸術大学

大正9（1920）年、「過去の建築圏よりの分離」を宣言し、分離派建築会が結成された。彼らは、欧米の新傾向に新しい建築を切り開く建築思潮を見いだし、日本の建築界に「モダニズム（近代主義）」の概念を導入していった最初期の世代にあたる。

その分離派の中心メンバーの一人、堀口捨己（1895-1984）は、1923年渡欧し、ヨーロッパの諸都市を見て回る中、オランダの新建築に出会う。他国に先駆けて労働者階級のための住宅計画を盛んに実現しているオランダに注目した堀口は、帰国後まもなく『現代オランダ建築』（岩波書店、1924）を出版し、当地の建築事情を日本に広く知らしめた。この堀口の書の影響力は大きく、日本の建築界に俄かなオランダ・ブームを引き起こすことになった。

そして、これを機にオランダの新傾向に注目したのが、蔵田周忠、川喜田煉七郎、東畑謙三といった当時の青年建築家たちだった。彼らは、バウハウス叢書などを介してファン・ドゥースブルフの提示する「デ・スタイル」の造形や理念に触れ、そこに自らのめざす「モダニズム」のあり方を見いだしていったのである。

本発表は、堀口の書が少なからぬ影響力を発揮した後の、これら日本の青年建築家たちとオランダとの接点たどりながら、オランダの近代建築と日本をつなぐ造形と理念の伝播の諸相について検討するものである。

■造形としての「構成」

1920年代中頃より、旺盛な執筆活動を通じて日本に欧米近代建築の潮流を導入する

ことに大きく貢献した建築家、蔵田周忠（1895-1966）は、堀口の書を高く評価し、その影響を受けオランダに強い関心を寄せた一人である。蔵田は、1930年代はじめ、ベルリンのグロピウス事務所に籍を置きながらヨーロッパの近代主義建築を視察する。グロピウスのもとでトロッケンバウ（乾式構造家屋）の技術を学んだ蔵田は、帰国後、その方式を日本に普及させようと努力する。その実践例が、古仁所郎（1936）や金子郎（1936）である。

ただし、蔵田にとって、軽量版を基本的な構成要素とするトロッケンバウの技術にふさわしい造形は、グロピウスの実験住宅（1927）に見られる箱形のものではなく、彼がオランダで感銘を受けたデュドックの作品やファン・ドゥースブルフがパリのデ・スタイル展で発表した住宅モデル（1923）に見られる「面の立体的構成」だった。つまり蔵田は、グロピウス仕込みの合理主義的な建築理念を、「面の立体的構成」という造形意匠によって達成することを普遍的な理想としたのである。

さらに蔵田は、この「デ・スタイル」を契機とする先鋭の西欧現代建築に見られる「面体構成の発展」について探求し、そこに日本の伝統的な建築の造形意匠との国際的な共通性を見いだす。つまり蔵田は「面の立体的構成」に「日本的なもの」を発見し、そこに単なる西欧の模倣ではない普遍的な「構成」のあり方を見たのである。

■理念としての「構成」へ

一方、「デ・スタイル」の主宰者ファン・ドゥースブルフの論文の重要性をその作品以

上に評価したのが川喜田煉七郎だった。その川喜田が、1929年、『建築画報』に発表した「I氏の写場（写真館）」のインテリアや椅子における面の構成的な扱いに、「デ・ステイル」の造形やリートフェルトの椅子を想起させる造形が見られる。彼が建築技師としての機能主義を徹底させ、ソビエト・ウクライナ劇場コンペに入選する2年ほど前のことである。

川喜田は、この写真館の試みを「形のみの遊技」ではなしに、「科学的な必然的な何者か」に憧れずにはいられなかった彼のこのころの傾向を示す一作品であると位置付けた。「科学的な、必然的な何者か」を模索していた川喜田にとって、バウハウスをはじめヨーロッパの表現主義的傾向を合理主義に向かわせた「デ・ステイル」の理論や造形は、必要な過渡的手段の一つと捉えられていた。つまり、川喜田はファン・ドゥースブルフや「デ・ステイル」の造形と理念のあり方に、抽象的なものと現実的なものの対立性を学び、その上でより現実的な「科学的な」生活像の実現をめざし、自らの「構成教育」活動を展開するのである。

東畑謙三（1902-1998）もまた、独自にファン・ドゥースブルフの思想に注目した一人だった。1927年当時、京大の大学院生だった東畑は、バウハウス叢書に納められたファン・ドゥースブルフの『新しい造形芸術の基礎概念』（1925）を「非常に愛読」し、その「構成」の概念に、物の「構成」ということは一つの企画をするということであり、要求される機能に応じて「空間」を配置し、生活に会うように「構成」していくことが建築であると認識したという。

その後の欧米視察旅行で、アメリカのアルバート・カーンの産業建築に出会った東畑は、カーンの工場や組織のなかに「構成」の概念

を発見し、表現において主体が現れがちな「建築家」でなく「技師」をめざす。彼はファン・ドゥースブルフから「構成」や「空間」の概念を学び、そこから発展して自らの理想を「構成技師」に向かわせ、もっぱら産業建築の設計に向かったのである。

■「構成」という造形あるいは理念の伝播

蔵田や川喜田、東畑らは、「デ・ステイル」の造形や理念にそれぞれのめざす建築のあり方を見いだしていく。蔵田は、ファン・ドゥースブルフの「面の構成」に「日本的なもの」を発見し、普遍的な造形の理想を託した。一方、川喜田は、ファン・ドゥースブルフの理論や造形に「科学的な」建築へ向かうための過渡的方法論を見、東畑は、合理的、機能的な建築をめざす「構成技師」というあり方を発見する。つまり彼らとオランダを結びつけた「構成」という概念は少しずつ意味がずらされながら、彼らがめざすモダニズムへ向かう「結節点」の役割を果たしたのである。

ところで、ファン・ドゥースブルフが、1924年に発表した「デ・ステイル」建築の空間イメージ『造形的建築に向かって』はF. L. ライトの1900年代の住宅建築に由来することが知られている。しかも、そのライトが、日本建築の伝統的な建築の空間構成の影響を受けていることが指摘される。すなわち、蔵田が注目し、実践にまで反映させた「面の立体的構成」は、もとはといえば日本建築から抽出された伝統的な構成原理に端を発し、アメリカのライトを経由し、少しずつ解体され、抽象化されながら、モダニズムの言語として再び日本に舞い戻ってきたのである。そして、この意味や文化の違いを越えて伝播した「構成」という「かたち」の直接性にこそ、オランダの近代建築と日本との因果な結びつきが確認されるのである。